

## 折に触れ 四字熟語

### NO. 50 『夏炉冬扇』 かる とうせん

< 意味 > 時期はずれの無駄なものた。また、無用なもの、役に立たない言論や才能などのたとえ。夏の囲炉裏と冬の扇の意から。

君主の信望・寵愛を失った者や、寵愛を失った宮女、恋人に捨てられた女性のたとえとして用いられることもある。

< 出典 > 「論衡」第一卷・逢遇

世俗之議曰、賢人可遇、不遇、亦自其咎也。生不（而）希世准主、觀鑒治内、調能定説、審詞（伺）際會、能進（進能）有補、瞻（則）主（士）何不遇之有。今則不然。作（進）無益之能、納無補之説、以夏進鑪、以冬奏扇、為所不欲得之事、獻所不欲聞之語。其不遇禍、幸矣、何福祐之有乎。

読み下し：『世俗の議に曰く、賢人は遇ふ可く、遇はざるは、亦自ら其の咎なり。生れ而（不）世を希ひ主に准じ、觀鑒して内を治め、能を調べて説を定め、審に際會を伺（詞）ひ、能を進めて（能進）補有らば、則（瞻）ち、士（主）何の不遇か之れ有らん。今は則ち然らず。無益の能を進（作）め、補ひ無きの説を納れ、夏を以て鑪を進め、冬を以て扇を奏め、得んことを欲せざる所の事を為し、聞かんことを欲せざる所の語を獻ず。其の禍に遇はざるは幸なり、何の福祐か之れ有らん、と。』

通 釈： 俗世間にいわれている議論に次のようなものがある。「賢人はめぐり合わせの善いのが当然であり、その悪いのは自分のせいである。この世に生まれて、世間に期待をかけて主君に照準を合わせ、自分の言行を観察・反省して、内心の収容につとめ、才能をよく考えて政治的主張をきめ、ここぞという機会を適確にとらえ、才能をささげて君主のたしになるならば、士たるものどうしてめぐり合わせの悪いことなどあろうか。ところが今はちがう。役にもたない才能をささげ、何のたしもならない意見をさしあげるのは、夏に炉を出し冬に団扇をすすめるようなもので、主君がぜひにと望みもせぬ事を行い、聞きたいとも思わぬ意見を獻ずることになる。それで禍いに出会わなければ、もっけの幸いというもので、どうして幸福や祐助などあろうか」と。

語 釈： 「夏炉」は「夏鑪」とも書きます。

一 言： 夏シリーズ3

「冬扇夏炉」ともいいます。

参照文献： 新釈漢文大系「論衡」上 岩波書店「四字熟語辞典」